

# 歴史的出来事との遭遇と青年たちの危機的移行

## ——炭鉱閉山によるライフコースの攪乱と軌道修正——

早稲田大学大学院・日本学術振興会 笠原良太

### 1. 目的

戦後日本における成人期への移行は、高度成長期に高学歴化ならびに新卒一括採用を通して、移行出来事の経験順序と期間が制度化し、「高度成長期型モデル」(安藤 2010)として標準化した。ただし、青年期に歴史的出来事に遭遇し、ライフコースの攪乱・中断を経験した際の危機的移行に関してこれまで十分に検討されてこなかった。青年たちはいかなる課題や葛藤を抱え、そして、ライフコースの軌道を修正するために、どのような戦略をとったのだろうか。

以上の関心のもと、本報告では、1970年代に閉山した炭鉱を事例に、突発的な社会的出来事に遭遇した青年たちの高校進学(成人期への移行の準備段階)に着目する。閉山は、地域社会の崩壊をもたらし、家族や仲間集団に多大な影響を同時的に及ぼしたという点で、青年たちにとって大きな衝撃であった。

### 2. 方法

上記の問いを解明するために、本報告では1970年に閉山した尺別炭鉱(北海道旧音別町)を主な対象とし、比較対象として、1971年に大閉山した常磐炭礦(福島県いわき市)を取り上げる。前者は閉山とともに地域が崩壊した事例であり、後者は産業転換を成功させて地域が存続した事例である。具体的なデータは、以下の通りである。

- ・尺別: 東京尺別会・尺別炭鉱中学校同期会「尺別炭鉱で暮らした人びと」調査データ(産炭地研究会、2016~17年度実施)
- ・常磐: 「常磐炭鉱で働いた人びと」調査データ(正岡ら編 1998-2007)

※分析コーホート: 閉山時中学校以下在学者(尺別: 1954-58年出生、常磐: 1955-59年出生)

### 3. 結果・結論

主な結果は以下の3点である。第一に、両炭鉱の青年たちは、閉山に伴う親の失業や地域移動によって予期せぬ社会移動を経験したが、標準的な移行にむけた第一歩として高校進学を志向した。第二に、青年たちが新天地での適応課題(学校文化や都市的ライフスタイルへの適応等)を達成しながら高校進学・卒業を達成できた背景には、青年たち自身の人的能力だけでなく、親の早期の再就職や大都市圏への移動、新天地での早期適応といった家族戦略があった。そして、第三に、こうした軌道修正にむけた努力や戦略は、両炭鉱の青年ならびに家族にみられたが、閉山が地域全体に壊滅的な影響をもたらした尺別の事例でより顕著であった。

以上のように、歴史的出来事を経験した青年たちは、新たな状況に対する適応という不利や不連続性を抱えながらも、個人ならびに家族の資源を用いて、ライフコース軌道を修正していった。彼らの移行は標準的であったが、社会的適応が求められていたという点において、人生の転機であったといえる。

#### 参考文献

- 安藤由美, 2010, 「戦後日本の成人期への移行の変容」 岩上真珠編『〈若者と親〉の社会学: 未婚期の自立を考える』青弓社。
- 正岡寛司ほか編, 1998-2007, 『炭鉱労働者の閉山離職とキャリアの再形成』 I-X, 早稲田大学文学部社会学研究室。